

音を末尾子音に有する短い音節における高昇型、この二つの声調類は C.T. 文字そのままでは表わすことができないため、本書ではこれら 2 者を「sǎŋ-thúm」と称し、それらを有する音節に下線をほどこすことにより表わしている。

2) N.T. における /n/ は C.T. にはないが、これは、/ñ/ を <ŋ/ > で、/j/ を <ɣ/ > で表わし分けており、問題とはならない。

3) C.T. では /w/ を伴う子音結合は /kw, khw/ しかないが N.T. ではその他の子音と /w/ との結合が存在する。本書では子音結合を <Cw- > で表わし、結合せずに 2 音節になるものを <CVw- > で表わしている。例えば、/swaam/ と /sawád/ などである。

これらの点を理解しておけば、本書の C.T. 文字による表記から音素表記に変えることは問題がないであろう。他の辞典の多くにおいては、子音、母音の相異に関する説明はなされているが、声調類についての正確な説明を欠いている。この点で本書は他の書よりも詳細だと言えよう。本書における N.T. は、子音、母音および声調類の組織から見て、チェンマイの方言、あるいはそれに最も近い方言と認められる。また集められた語彙の中には、現在では C.T. の語彙に取って代わられて、かなりの年寄りで田舎に住んでいる人でなければ覚えていないような語彙が多く含まれている。(桂 満希郎)

Sylvia J. Lombard (compiled) and Herbert Purnell (edited). *Yao-English Dictionary*. Linguistics Series II, Data Paper No. 69, Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University, Ithaca, 1968. 363+xiv pp.

ヤオ語に限らず東南アジアの少数民族の言語に関する資料というのは非常にとぼしいのであるが、近年各国の研究者による調査が盛んになり、その結果報告が出始めてきた。本書もそれらの一つとして非常に意義深いものと言えよう。著者は主として北部タイにおいて、1952年より1962年にわたってヤオ族と接触を保ち、その時に収集した言語資料の一部を整理し、辞書としたのが本書である。今までに行な

われたヤオ語の研究報告は極めて少なく、辞書としては、本書が F.M. Savina, "Dictionnaire Frafais-Man," *BEFEO* 26:1-225, 1926 につぐ第 2 冊目である。Savina が主として北ベトナムにおける Kim-di ヤオ語を扱っているのに対し、本書はタイ国北部、ラオスに分布する Lu Mien ヤオ語を対象としており、見出し語だけで 3234 語、その他をも含めて合計すると 11,000 語(句)を有する。この種の言語に関するパイオニア的報告としてはかなり大きなものになっている。Lu Mien ヤオ語と言うのは Savina の Kim-di ヤオ語よりも、G. B. Downer, "Phonology of the Word in Highland Yao," *BSOAS* 24: 531-541, 1961 における Tai-pan ヤオ語により近いものである。

本書における表記法は、宣教師 E. J. C. Cox により考案され、1954 年ごろから北部タイ国で用いられてきたローマ字表記であり、Savina, Downer の仕事により知ることのできるベトナム語のローマ字表記に改良を加えたものとはかなり違っている。純粋な音素表記ではないが、非常に高度に言語の音素体系を反映していることは、本書に付せられた音素体系との対照表を見てもわかる。しかし、あまりにもタイプライター使用上の便宜とか、その他の実用的な便利さを重視したためか、例えば、/ŋ/ を <v> で表記するなど、通常の音素記号に対する概念からかけ離れた表記が多いため、本書を自由に使いこなすためには、この表記法にかなりよく慣れる必要があるだろう。声調は音節の直後に付せられた文字により表わされている。この辞書の表記方法にもとづいて、音素体系を考えること、あるいはここに集められた資料を音素表記にもどして、それぞれの目的に応じて使用することは出来るのであるが、ただ声調類の変化に関する説明が少なすぎ、Suprasegmental phonemes についての説明がないために、この辞書のみから言語構造を完全に知ることができないのは残念である。例文は豊富であり、著者のヤオ語に関する深い知識と能力とを示している。なお、本書は本文の他に、Appendix A—E が加えられており、それぞれ、数詞、親族語彙、命名法、諺および慣用句、類別詞に関して有用な説明が成されている。研究のため、また実目的のためにも、役に立つ資料と言えよう。(桂 満希郎)